『シャーロット・ブロンテの生涯』研究（14）

メイ・シンクレア　その2

芦　澤　久　江

1．はじめに

メイ・シンクレア（May Sinclair, 1879-1946）の著書は『ブロンテ三姉妹』（*The Three Brontës*, 1914）と題していながらも、そのほとんどのページがシャーロット（Charlotte Brontë, 1816-55）に関することで占められている。というのは、シンクレアが自分の生い立ちと重ね合わせ、ロール・モデルとしてシャーロットにもっとも関心を寄せていたからである。一方アン（Anne Brontë, 1820-49）についての言及はあまりなされていない。アンには伝記的証拠があまり残されていないからである。

エミリについてはどうであろうか。エミリの「ゴンダル」(‘Gondal’)や『嵐が丘』（*Wuthering Heights*, 1847）についてはシンクレアの見解を示しており、なかには貴重な批評もある。そこで拙論ではシンクレアがエミリをどのように見ていたかを考察してみたい。

2．エミリの詩

シャーロットに比べると、エミリは伝記的資料が圧倒的に少ない。しかしシャーロットは伝記的資料が豊富な分だけ、真実とはいえないことも含まれており、信憑性に欠けるものもある(Sinclair 168)。ところがエミリについて語られてきたことは少ないが、彼女を愛している者、シャーロット、アン、エレン、召使による証言であるので決して偽りではないとシンクレアは主張している（168)。シャーロットたちによれば、エミリは背が高く、ラフな格好で荒野を青年のような足取りで歩いたと言われている。またエミリは洗練されていて、頭を高く上げ、長い黒い髪はカールされ、鷲鼻、青白い顔、ダークグレイの燃えるようなうるんだ瞳をしていた（Sinclair 166)。彼女の眼は物質的なことにはまったく無関心で、現実から離れているかのようだということである(166)。これらは原典が明示されておらず、おそらく主としてシャーロットの証言を基にしているのであろう。先に述べたように、シンクレアはシャーロットが述べていることは真実であると考えているが、果たしてそうであろうか。シャーロットがギャスケル（Elizabeth Cleghorn Gaskell, 1810-65）に語ったことはすべてがすべて真実とは思われない。シャーロットは作家という職業柄、人々を感動させる術を熟知していた。すなわちシャーロットが読者に哀感をそそるように語ったであろうことは容易に推測できる。したがってシンクレアが述べているように、エミリを愛する者が

語ったからといって、それらが真実であるということにはならない。むしろ近親者だからこそ、身内に都合のいい証言しかせず、より主観的になったり、誇張したりするということもあり得るのである。

メーテルリンク（Maurice Materlinck, 1826-1949）がエミリを「自己充足した魂」(307）の持ち主だったと述べていることを引用しながら、シンクレアはエミリの魂が何ものにもとらわれず自由であったと述べている（168)。すなわちエミリの汎神論はどこかに由来したものではなく、エミリの魂のなかで確立したものであり、神秘主義もまた影響を受けたものではないというのである。

シャーロットは物質的生活に即して生きていたため、達成できない場合には跪き渇望し、彼女の作品に描かれる情熱はすべて、人生の経験から生まれてきたものであった。それに対してエミリの描く情熱は彼女の経験上のものではなく、過去にもこれ以降にもエミリの身には起こりそうにないものであった。エミリの天才は偉大で、想像だけではなく、密かな魂から発しているからだとシンクレアは述べる（171)。このようにシンクレアはシャーロットとエミリの情熱について焦点を当て、それらの相違点について述べている。

宗教的面においても、シャーロットやアンと違い、エミリは宗教的服従の言葉を発してはいない(Sinclair 171)。シャーロットやアンが宗教で得た慰めや憐れみはエミリが感じた神の実在性とは何の比較にもならない。エミリはシャーロットやアンとは違い、実人生において何かの影響を受けた、あるいは経験したということが問題とはならない。エミリは物質的生活にはまったく心を寄せることがなく、問題なのは彼女の魂だとシンクレアは主張しているのである。

注目すべきことには、シンクレアはエミリのいくつかの詩について分析を行なっている。シンクレアは「大地」(‘The Earth’）の詩を取り上げて、エミリがブレイクを読んだかどうかは疑わしいが、ブレイク（William Blake, 1757-1827）の詩を思い起こさせるとしている（173)。

The earth that wakes one human heart to feeling
Can centre both the worlds of Heaven and Hell.（Hatfield 255-56）

シンクレアはこの詩をエミリの詩であると考えている。しかしこの詩はエミリのものであるかどうか疑わしいとされ、批評家たちを悩ましてきた。なぜなら、この詩の原稿も写本も残っていないからである。ゲザリ（Janet Gezari, 1945- ）の説明によれば、この詩の帰属については紆余曲折の論説があった。ハットフィールド（C. W. Hatfield, ？-1942）は1941年の詩集出版に当たって、この詩はエミリのものではなく、シャーロットのものだと考えていた。W.S.ウィリアムズ（W. S. Williams）に宛てたシャーロットの手紙（1849年 9 月21日付）のなかに、この詩と類似した心情が描かれていたため、ハットフィールドはシャーロットのものと結論づけた。しかしチタム(Edward Chitham）は全体的な内容からこの詩はエミリの特徴を表していると述べた。ノイフェルト（Victor A. Neufeldt）も言語や内容からエミリの詩であるという見方を示している（Gezari 284)。したがって今日ではこの詩はエミリのものと見做すのが一般的である。

シンクレアによれば、この詩は明らかにブレイクがつねに見ていたものをエミリも垣間見ていたことを裏付けている。しかし彼女の心はつねに均衡を保っていたわけではなく、大地との合一と愛のヴィジョンの間で揺れ動いていた（Sinclair 173）。シンクレアは、神秘主義、汎神論の点でエミリとブレイクには類似性があると述べているが、ブレイクのどの詩と類似しているか明らかにされておらず、比較が不十分である。

さらにシンクレアは「夜風」（'The Night Wind'）を取り上げ、最初の 8 連は取るに足りないが、最後の 9 連目はたった 4 行ではあるが、これほど魔力をもち、感情を掻き立てる詩はないと述べている（174-45）。

また「哲学者」（'The Philosopher'）では人間の心に感動を与える絶対的なものに飢え、精霊に悩まされる困惑、善を支配する悪の勝利を表現し、哲学者の名にふさわしい超越的な現実のヴィジョンを想像していると述べている（Sinclair 175）。これはまさにブレイクが描いた超越した魂のヴィジョンである（Sinclair 176）。

「囚人」（'The Prisoner'）は断片で、別のグループに分けられるものかもしれないが、ヴィジョンを描いた同じ種のものであり（Sinclair 176－77）、ここにも瞑想を越えた神秘主義者の言葉が書かれているとシンクレアは述べている（177）。

「幻想家」（'The Visionary'）は、シンクレアによれば十字架のヨハネの「魂の暗い夜」（'En una Noche Oscura'）[1] を思い起こさせる（178）。この二つの詩には明らかに隔たりはあるが、エミリの詩には十字架のヨハネの詩に描かれているように、神秘的傾向が表わされており、二人の霊的経験は幾分違いはあるものの、超越的次元という点では同じである（Sinclair 179-80）。

「わたしの魂は怯懦ではない」（'No Coward Soul is Mine'）は,、一般的にはエミリのもっとも優れた詩の一つとして考えられているが、シンクレアはいちばん素晴らしい詩とは思われないと述べている（183）。この詩の 5 連目は18世紀の理神論（Deism）の詩人を思い起させる（Sinclair 184）。理神論は、神の存在を自然宗教の範囲内で合理的に信じる立場のことである。理神論の詩人のなかでもとりわけパルメニデス（Parmenides, BC 500 or BC 475-？）の詩と類似した部分がある（Sinclair 184）。パルメニデスはハワースで知られていなかったと思われるが、「わたしの魂は怯懦ではない」の最後の連はパルメデニスの詩と類似しているとシンクレアは主張している（184）。しかし田舎の司祭館生まれの少女がこのような作品を生み出したことは驚きである。彼女には独立した霊的な洞察力があった。エミリは父親の日曜日の説教を聴くことを拒否し、神と人間の分離や神の仲介というキリスト教的考えを受け入れることはできなかった。それゆえエミリの考えは明らかに異端であった。エミリは詩のなかでこうした心の奥底の秘め事を書き綴っていた（Sinclair 184）。言い換えれば、シャーロットがエミリの詩を見つけた時に、エミリがひどく苛立ち悩まされたのは、それらの詩がエミリの内奥の秘密を書き留めたものだったからである（Sinclair 185）。

シンクレアの時代にはエミリの詩はいまだすべて公表されてはいなかった。シャーロットが39編の詩集を出版した後、出版されていない67編がアメリカで登場し、そしてショーター（Clement

K. Shorter, 1857-1926）がさらに71編を出版した。シンクレアはショーター編集のエミリの詩集は(編集的権威において)シャーロットが編纂した1846年版、1850年版に肩を並べることができないとしても、そのなかにこれまで知られていないエミリの天才を表わす作品が多く含まれていると主張している。一編、二編の詩でさえ、エミリの魂を解明するのに役立つのである（Sinclair 186)。

しかし人々が無関心であるのは、詩を読む人々が『嵐が丘』は読むものの、エミリの詩を読まないからである。エミリの詩は簡素であり、そのため多くの人々はそれに対して拒絶反応を示している。シンクレアが最近の読書事情をこのように嘆いていることは大変興味深い。すなわち、当時ロンドンの'Vigo street'からイエイツ（W. B. Yeats,1865-1939)、エズラ・パウンド（Ezra Pound, 1871-1909)、J.M.シング（J. M. Synge,1885-1972）など20世紀モダニズムを代表する新しい詩人が輩出され、エミリの詩はすっかり顧みられなくなってしまったのである。

ショーター編の詩集にはエミリが書いた美しいバラッド「ダグラスの遠乗り」('Douglas' Ride')が含まれている。またこれまでの形式とは違った異国情緒あふれる美、音楽、リズムの魔力のある詩として一編の詩をシンクレアは引用しているが（189－90)、わたしが調べた限りにおいてこの詩はエミリのものではなかった。シンクレアはほかにも「老克己主義者」('The Old Stoic')を紹介し、こうした作品が出版されたら、エミリ・ブロンテの理解がさらに深まるとしている（192)。

3．ゴンダル

わたしがシンクレアの見解のなかでもっとも評価している点は「ゴンダル」を重視しているということである。シンクレアはショーターの編纂した詩集のなかに「ゴンダル年代記」が収められていないことを非難している（192)。さらにシンクレアは人々がエミリとアンが遊びをしていたこと以外何も知らないと述べている（193)。エミリの日誌のなかには明らかにゴンダルに関する記述があるが、それに対応している詩は見当たらない。ブロンテの専門家たちは、このゴンダル年代記を子どもっぽいものとして片づけてしまっている（Sinclair 194)。一方シンクレアは年代記がなくても、詩は残っているのだから、それを手がかりとしてゴンダル物語を再構成しようとしている。21世紀の今日、ゴンダル物語の再構成は放棄され、この研究はいったん終息したものと見做してよい。ゴンダルを再構成するには年代記が失われているうえ、登場人物がイニシャルで表され物語の再構成を複雑にしているからである。そのためウィリアム・ペイデン（William Paden）を最後に、ゴンダル物語の再構成はそれ以上発展していない。新しい証拠や資料の発見もなく、現在において再構成を進める手段は見当たらない。そうでなくても、今日多くの専門家たちは「ゴンダル」を軽視する傾向に陥っている。

シンクレアの時代には現在よりも資料が圧倒的に少なく、「ゴンダル」の再構成を試みる人は少なかった。前述したように、専門家たちは「ゴンダル」を子どもじみていると考え無視していた。そうした時代にシンクレアは数少ない手がかりを頼りに、ゴンダルを再構成しようとしている姿勢に大いに評価できる。

シンクレアが「ゴンダル」に固執しているのは、「ゴンダル」に『嵐が丘』の源があると考えたからである。その点においてシンクレアは正しい。たとえばウォード（Mary A. Ward, 1851-1920）は『嵐が丘』の源はホフマン（E. T. A. Hoffmann, 1776－1822）だと考えた（Ward, Intord. to *Wuthering Heights* xxxviii）。そのような研究方法は間違いとは言えない。確かにエミリはドイツ文学に傾倒していたので、ウォードの主張も一理ある。しかしドイツ文学との類似性を指摘する印象批評よりも、「ゴンダル」研究の方が『嵐が丘』の本質に迫ることになる。

「ゴンダル」詩は戦い、囚われ、追放、ヒロイズム、殉教、抵抗、魔法、預言、愛をテーマとしている。「想い出」（'Remembrance'）はもっとも情熱的な詩として、ほかの詩とは区別されている。しかしシンクレアはこの詩がゴンダル伝説のなかに入るものだと考えている（195）。「ゴンダル」ですぐれているのは敗北し、不名誉となり、疎外された恋人に対する女性の思いやヒースクリフ（Heathcliff）のような悪を創造していることである（Sinclair 195-96）。彼あるいは彼のような登場人物は名誉の戦死であり、祝福されず、友人もいない打ち棄てられた母親の子どもである。それらは間違いなく「ゴンダル」詩である。「ジェラルディーン」（'Geraldine'）において、彼女は森の洞穴で、自分の子どもの無事を祈る。ジェラルディーンは追放された母親なのである。「二人の子ども」（'The Two Children'）では追放された母親の子どももまた、追放されるよう運命づけられている。一方「歓びの子ども」は太陽のように光耀く髪をしていて、彼の守護天使であることを誓う。「あの墓のうえに涙を流すのはやめなさい」（'Shed no tears o'er that tomb'）について、最近の批評家はブランウェル（Patrick Branwell Brontë, 1817-48）への非難が描かれていると述べている（Sinclair 198）。ブランウェルを描いた詩かどうかは別として、この詩は明らかに「二人の子ども」（'The Two Children'）、「群れから離れてさまよう者」（'The Wanderer from the Fold'）と関連のある詩である（Sinclair 199）。この詩には不名誉となった恋人に対するゴンダルの女性の嘆きが表されており、非難の声、情熱と憐れみの声が対話している。

シンクレアはザモーナ（Zamorna）の詩を取り上げ、美的あるいは技法的点で言えば、優れてはいないが、物語において重要な詩であると述べている。しかし、これは明らかにエミリの詩ではなく、シンクレアは混同している。シンクレアは「ゴンダル」の登場人物たちについて次のようにまとめている。グレネデン（Gleneden）は暴君を殺し、投獄され、ジュリアス・アンゴラ（Julius Angora）はゴンダルの貴族の集まった大聖堂で「敬虔な目を上げ」、アルメドアの戦いでゴンダルの愛国者を率い、そこで敗北し、敵と共に倒れる。彼はロジーナ（Rosina）に愛されるが、ロジーナはキャサリン・アーンショー（Catherine Earnshaw）の原型である。ジュリアス王は南の国を離れ、ロジーナへの想いを断ち切れず北の国で危険に瀕する。ダグラス（Douglas）は「茶色の山側」のオーガスタ（Augusta）の物語に登場するが、彼が誰なのか、何をしていたのか、オーガスタを殺したのか、あるいは他の誰かがオーガスタを殺したのかはわかっていない。キャサリン・アーンショーによく似たオーガスタは情熱と嫉妬から出来ている人物で、恋人に対して誠実ではない。彼女は「汝のホールに火を灯せ」（'Light up thy halls'）で抵抗、憎しみ、嘆きの残酷な歌を歌っている。フェルナンド（Fernand）はザモーナから恋人を奪い、エドガー・リントン

（Edgar Linton）の一種の原型となっていると述べられている。

ここでもまたシンクレアはザモーナを「ゴンダル」の登場人物と混同しているが、その記述のなかに興味深い点があるので、シンクレアがどのようにザモーナについて述べているか見てみよう。ザモーナは北のイリアッドのアキレウスであり、戦争と愛の息子、母親に捨てられ天から祝福されない宿命の子どもであり、まさにヒースクリフのようである。ザモーナの情熱はまさにヒースクリフの情熱であり、彼は愛と宿敵の世界に生きている。前述したように、ザモーナは「ゴンダル」の登場人物ではない。なぜシンクレアがザモーナを「ゴンダル」の登場人物だと考えたかはわからない。しかしザモーナは、シャーロットとブランウェルが創造していた「アングリア」（‘Angria’）の世界の主人公にもかかわらず、ザモーナとヒースクリフには共通点があることは確かである。わたしはブロンテ姉妹の作品の源にはブランウェルがいると考えているので、シンクレアがザモーナとヒースクリフに共通点があると指摘していることは間違っているとは思われない。

シンクレアはエミリをゴンダルの人だったと言っており、こうした言及はエミリを理解している人の言葉のように思われる。前述したように、現代のブロンテ研究において「ゴンダル」を蔑ろにする専門家が多いが、それは「ゴンダル」こそエミリの世界だという認識がないからである。『嵐が丘』は最初から世間に発表するつもりで書かれているので、そこにはエミリが自分を隠すための防衛手段が働いている。ところが「ゴンダル」は登場人物の正体をわからないようにするため、名前にはイニシャルを使用している。「ゴンダル」は読者のいない純粋な遊びの世界であり、エミリが何の制限もなく自由に生きることのできた想像の世界であった。そうした遊びにこそエミリの本質が表れており、「ゴンダル」を知ることこそエミリを知ることになる。それゆえシンクレアがエミリはゴンダルの人であったと述べている点は非常に重要なことなのである。

４．『嵐が丘』

『嵐が丘』はいかなる派にも属さず、リアリズムでもロマンスでもなく、一人で生まれ、一人で立った。キャサリンとヒースクリフは精神的同質の世界に情熱をもって生きていた。またモラルの問題などエミリの頭にはなく、『嵐が丘』には、異教主義、汎神論、先験論、神秘主義、大地の崇拝が描かれている（Sinclair 224）。

メアリ・ロビンソン（Mary Robinson, 1857-1944）は、『嵐が丘』は「遺伝」の問題であると述べているが（159）、シンクレアはそうではないと主張する（212-13）。ヘアトン（Hareton）はヒンドリー（Hindley）が酒飲みであったことを引き継いではいないし、リントン・ヒースクリフ（Linton Heathcliff）もヒースクリフと肉体的類似性がない。キャサリン・リントン（Catherine Linton）は母親キャサリンの気性を引き継いでいるが、それぞれの恋愛における情熱は別物である（Sinclair 213）。

エミリの素晴らしい点は脇役の描き方にある。ロックウッド（Lockwood）は傍観者であるが、ネリー（Nelly）は個性的であり、ジョウゼフ（Joseph）はカルビニストとして傑作であり、エド

ガー（Edgar）は弱々しく、イザベラ（Izabella）はセンチメンタリストである。イザベラはメレディス（George Meredith, 1828-1909）のエヴァ・ハリントン（Eva Harrington）の無垢を信じるジュリアン（Julian）に似ている（Sinclair 226）。エミリがその住んでいた土地ハワースを舞台にしていた点で、トーマス・ハーディ（Thomas Hardy, 1840-1928）と共通しているとシンクレアは指摘している（230）。

エミリはシャーロットほど形式については考えていなかったし、ドラマチックなものも描いてはいないが、人間の情熱について本能的な知識をもっていた（Sinclair 234）。情熱が目ざめ、クライマックスに至り、やがては消耗していくさまが自然に描かれている（Sinclair 234）。エミリは決して情熱をクライマックスに急き立てたり、消耗でかき混ぜたりしない。この観点から言えば、エミリはシャーロットよりリアリストである（Sinclair 234）。シンクレアは正鵠を得ているであろう。エミリは現実にはない奇想天外な話を書いてはいないし、不自然な箇所もない。それどころか、『嵐が丘』のあらすじを辿って行けば年譜や地図が書けるほど、細部は緻密に構成されている。現実にはありえないと思われるようなものも、最後にはすべてが調和することによって、読者には現実に起こり得る物語として認識されるのである。

ところがシンクレアは『嵐が丘』の構造に問題があるとしている（231）。構造に欠陥があるために何度も読み直しを迫られると言う。二つの家、二つの世代、二重構造になった会話、物語、場面、そして時間が行きつ戻りつする点が読み直しの原因になっている（Sinclair 231）。また語りが二重、三重、四重になっているため、信頼に足るべきものではないという大胆な言及も行なっている（Sinclair 231）。こうした指摘は至極当然であったかもしれない。読者を撹乱する狙いがエミリのまさに戦略だったのであろう。しかしシンクレアの指摘している点は言うまでもなくエミリの欠点ではなく、長所でさえある。エミリが取った手法は19世紀の小説では珍しいものであった。そもそも小説というジャンルがイギリスで生まれたのは18世紀のことであり、19世紀にようやく開花したけれども、手法はまだそれほど複雑ではなかった。『嵐が丘』の語りの構造や時間の操作は意識の流れの小説に見られるように20世紀のものである。シンクレアは20世紀の人ではあるが、シンクレアがこの著書を表した1914年にはまだロレンス（D. H. Lawrence,1885-1930）が『息子と恋人』（*Sons and Lovers*, 1913）を出版したばかりで、ジョイス（James Jyoce, 1882－1941）、ウルフ（Virginia Woolf, 18812-1941）といった作家が本格的に「意識の流れ」を描く小説を生み出してはいなかった。そのためシンクレアには複雑な構造が欠陥だと思われたにちがいないのである。

かつてシドニー・ドウベル（Sydney Dobell, 1824-74）は『嵐が丘』はシャーロットが書いたものと思っていたが、シンクレアはシャーロットにはこのような作品は書けなかったであろうと述べている（234）。さらにシンクレアはマラム・デンブルビー（J. Malham-Dembleby, c1874-？）がシャーロットとエミリの文章を比べて、『嵐が丘』はエミリの作品ではなくシャーロットの作品であると述べたことに対しても憤っている。こうした間違いは前述したシドニー・ドウベルが混同したことから起きているとシンクレアは述べている（234-35）。

エミリは『嵐が丘』を書いたとは一言も述べていないし、それが確かであると言える証拠はシャー

ロットの証言しかない。その結果シャーロットの死後、またしても『嵐が丘』の作者についての論争が起こった。『嵐が丘』はブランウェルが書いたとするものである。フランシス・グランディ（Francis Grundy, 1822？-？）がそれを主張し、レイランド（Francis Leyland, 1813-94）も同様であった。しかし今ではその説を信じる者はいないが、ブランウェルが自分の道を進んで行けば偉大な詩人、小説家になり得たとシンクレアは推測している（236）。

シンクレアはシャーロット、エミリ、アンの天才は運命だと述べている（237）。彼女は著書全般を通して、「運命」と言う言葉を使い、彼女たちの天才を表わしている。『嵐が丘』の源は一体何であろうかと問うとき、エミリの場合「経験」によるものでは答えにはならない。『嵐が丘』の源が「ゴンダル」だとすれば、エミリはヘンリ・アンゴラ、ロジーナであったようにヒースクリフ、キャサリンであったのである（Sinclair 237）。

シンクレアは最近の批評がブロンテたちの「経験」を重視して、そこから作品を解釈する傾向にあると批判している。シンクレアが言う「経験」とは伝記的事実であろう。この時代はギャスケルの伝記以降、さまざまな人々がシャーロットだけでなく、パトリック（Patrick Brontë, 1777-1861）、ブランウェル、エミリについて新しい証言をもとに、伝記作品を作り上げている。特に新事実として明るみに出て人々がもっとも関心をもったことは、エジェ氏（Constantin Heger, 1809-96）とシャーロットの関係であったであろう。ギャスケルの伝記では意図的にその事実は隠され、シャーロットとエジェ氏は単なる師弟関係にすぎなかったと印象づけた。ところが『ジェイン・エア』（*Jane Eyre*, 1847）のロチェスター（Rochester）のモデルについては、多くの関心が高まるばかりで、シャーロットの実人生において対応する人物はいないのかと人々は詮索し、シャーロットの生涯のなかにその根源を探ろうとする動きが続いた。大量のブロンテの未発表の資料をニコルズ（Arthur Bell Nicholls, 1818-1906）から譲り受けていたショーターは、シャーロットのエジェ氏への想いを知っていたであろうが、彼はそのことを暗黙のうちに伏せていた。おそらくショーターはニコルズへの気遣いから、そのような事実を洩らそうとしなかったにちがいない。しかし時とともに世間の人々はシャーロットとエジェ氏の関係を認識していたようである。証拠が明るみに出るまでは、公にはできなかったが、二人の関係には多くの関心が集まっていたのである。それゆえシンクレアはそうした人々の態度に苦言を呈しているのである。前述したように、シンクレアはシャーロットを自分のロール・モデルとしていた。そのためシャーロットの陰の部分については目を逸らしたかったのであろう。シンクレアは著書の最後で、大事なことは無垢な眼を取り戻すことであると述べている（240）。シンクレアは自分が子ども時代にシャーロットの伝記を読んだときの新鮮な気もちを述べながら、作品の源を伝記に頼るのではなく、作品を作品として無垢な眼で見るべきであると主張しているのである。

5．おわりに

シンクレアのシャーロット論についてはやや偏重しているところが目立ったが、エミリに関して

はそのようなことはなかった。それどころか、「ゴンダル」を重視するシンクレアの姿勢は、シンクレアが真にエミリを理解していたことを示す証拠となっている。シンクレアの時代にはまだ「ゴンダル」の解明などされておらず、シンクレアが述べているように「ゴンダル」を子どもじみているとして簡単に捨て去る批評家が大半であった。現代においても、「ゴンダル」を重視する批評家が少ないことはすでに述べたとおりであるが、「ゴンダル」はまさしくエミリそのものであり、『嵐が丘』研究の前に「ゴンダル」は欠かせない基礎研究である。したがってシンクレアの「ゴンダル」を重視する見解は正しいと言えるのである。

注

1．シンクレアはこの作品の題名を'En una noche escura'としているが、正しくは'En una noche oscura'である。シンクレアが間違えたのであろう。Brenan, Gerald. *St. John of the Cross:His Life and Poetry*. Translated by Lynda Nicholson. Cambridge Univesity Press, 1951.

参考文献

Brenan, Gerald. *St. John of the Cross: His Life and Poetry*. Translated. Lynda Nicholson. Cambridge Univesity Press, 1951.

Brontë, Emily Jane. *Emily Jane Brontë: The Complete Poems*. Ed. Janet Gazari. Penguin Classics, 1992.

Materlinck, Maurice. *Wisdom and Destiny*. Translated. Alfred Sutro. London: George Allen; New York: Dodd Mead & Co.,1898.

Robinson, Mary. *Emily Brontë*. London: W.H.Allen and Co., 1883.

Sinclair, May. *The Three Brontës*. London: Hutchinson and Co., Paternoster Row, 1914.

Ward, Mary A. Introduction. *Wuthering Heights*. London and New York: Harper & Brothers, 1904.